

寛永諸家譜

藤原氏系状五冊之内十八
文流

内閣文庫

番號 和 20199

冊數 186(131)

函號 76 1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊等で貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



● 八 赤尾

赤尾

松本

葛木

寛永諸家系圖傳

藤原氏

卷十八

交流

赤尾

本々加納と稱す累代賀茂乃赤尾也將軍
義教乃時一加納を河〜〜め赤尾と稱す

● 元久

大志尉

生國山城

淺草文庫

称光院の御中より元久が女官中法良
 このと記事ありて 勅勅を以て
 これ推へり元久も亦後河の法良
 関り配流せらる
 永享四年九月將軍義教富士山焚
 のよし東よりしき結ふこのと記
 かされて補補り補は 法良
 元久
 はあひひ久く一色河絶は

● 元重

庄右尉 生息後河 法良良安
 今川氏輝より法良

久吉

長五郎 生息同前 法良相吉
 氏輝より法良

忠重

孫次尉

生息同前

甲斐の一條ノ一法也

天正十六年四月甲子三歳ノ一

死也 法名淨海

忠成

松本五兵衛尉生息同前

法名休也

忠成松本五兵衛尉が婿となり家督を継ぐ

は有リ一跡尾を以て之松本と稱す

守世

刑部少輔

生息甲斐

天正十一年春列漢松ノ一をひくけ

め

右徳院殿ノ一法也

守世十歳なり

慶長五年真田陣ノ一供奉すそのち

大坂西御陣より去るに及ぶ所を法名

元和元年正月二十七日從五位下より叙

寛永十年八月六十歳より卒

法名淨俊

守勝

宮内少輔

生員武藏

台徳院殿

將軍家より法名ありて

元和元年六月十九日從五位下に

叙

守重

豊前守

生員同前

將軍家より法名ありて

寛永八年十一月二日從五位下より

叙

叙

守政

同十四年四月九日年

孫右衛尉

生息同前

將軍家一法如(た)くまの

守利

大膳

生息同前

實を宮内少輔守勝が子なり守重頼て
子とて

母を皇令宗女正貞素が女

肥後と号す

東福門院一法如(ま)はつ(ま)女

頭

寛永十五年

將軍家一法如(ま)はつ(ま)の

御命とかりゆりて伯父守重が家格

を法如

上総國市原天羽二郡のうらま

領地五百石をすり

家故
緩管木凡

● 元道

恩田伊賀守

生員冬河

元道を松井元道忠次が家老なり

元道を坂松平周防守と号す

赤尾

本を恩田と号す元勝と号す

めく赤尾とあり

元次

畠田竹太尉

後大和守と号す

生息同前

永祿三年冬列東条合戦の時きそ
乃を過横河賀よりとひて元次をよび
味思甚太尉歎少おをそし
歎戸をひらきあきしりひら
元次味思もみりしとる受り

敵門をこぎし矢をもちりてこまを
よせ味思體をもちりて敵をほく
元次を首をせよひて元次十七
歳なり

同六年七月乃同三列本願寺門徒
一揆のらひ元次をこく我功あり
其外刑原統房原合戦小として
よ軍忠

元禄元年江列小谷合戦の時

東照大権現兵を平ひて織田信長を
そとひたすよと現松井友近を
つひたてり決断しりしや元次
こまりてきりて首級をとり
元次が才五味右馬元保相倉が騎馬
の者や馬上あてあひてきりし
馬よりおひる少少元保あやう
かきりし元次かけあててこま
きそとひその敵をうらとふは

時豊長秀志軍中におもせりてこま
を覚えていそく白茅色乃馬より
ころをたふものぐりや同給ふ元次
て徳川家乃軍將松井友近が家
長思田竹太夫とよものなりとこま
秀吉はひをとりて元次
はあていそく他日かきりしや
きりて我を尋ねてくれ
遇ふ人しとのたまふ元次こま

領掌りやうさう下しもまで下くだりたるかひをりて
冬河ふゆがわより一月元次ゆきて秀吉ひでよしより
決りて人少ひとすくし父元直ちちのむねただいかりこまを
少すくく決きていよくたふ累代かさねのむね
をすすて富とみをもとめしやとよして
進まりりりて元次もふらふら少すくく
りりぬ

同年おなとし姉川合戦あねがわがくさつ乃少すくく元直ちちのむねただより
属まして元次我切ちがきりりり乃進退ちのまゐり

乃あひむ元次ちちのむねただひより元直ちちのむねただが傍かたはらをこふ
まむ元次進ちのまゐりり

大権現おほごんげんより清きよなるそまはるや今いま
日松井ひまつら元直ちちのむねただりりり

高たか見みありたまふ屋や少すくく元次ちちのむねただ
冬ふゆ元直ちちのむねただより属ましてまむ

大権現おほごんげん乃恩遇おんぐをかりるものなり

大権現おほごんげん演ま松まつより酒さけと元諸將ちちのむねしやうしやう松井まつら

元直ちちのむねただ忠次ちゆうじ
松平まつら氏うぢをこまらゆり
松井まつらをりりり松平まつらと別わかれ

本多豊後守為房長左衛門等見付り
下をいひ懸川をせむこのとき
近が家人石川新兵衛敵の首を
ら馬りの大いよらりて元
次なび小共部從星野角右衛門
右田五八等一が乃首を見せ
り元次の志りていしくなぞ
ここともの木で道海や我いみ世
小方屋もそとて別池か屋りて敵の

首をえさゆりいひくたあてか
らど中物ひ敵陣一をむく時
小次郎諸将中兵をひくか
り元次をたげぬけりい海ぶ
ゆがゆ有元次身ぞり死るか
四本多を後守りい
大権現元次を志り大御ふこと年久
し今それ死せを志りて
濱松一いなり

大権現より元次がこゝをこゝせたま
り何とこたへそ海つらんや少
た迫ておももも小馬をさめ侍
居るこゝに路より元次宛前さいぜんのこと
心のどく敵の首をもちきたるた迫
其途系ちえいをいましてわりてこゝを称
英せむ元次いかりそ首を河津小
舟にる友た迫よりこゝより豊後
こゝを和氣とひとま

大権現より御使ごしりて諸將しよしやうを先
た迫こゝにをひく元次を志す人
ゆかしと元次こゝを辞しり豊後
守こゝをなぶめくまかり元次
志すかひく濱松はまのねより
大権現元次り奉をせりた海
豊後守とた迫木が元次が勇
を法おそそ海川を
大権現まこゝより先よりこゝを

感謝たまふ

曰三年十月

大権現と武田信玄とを別三方原小
をひく合戦のとき元次が才元
保我死に翌日元次抄きてい
今日我敵を討て才比讎を報
せんも一さなきりをはひてい
るびかたす昨日我も一所小
河く才もさうい海どきも乃

をさしひく一騎のいづこ久持色
去右目の提りをはひく敵とあひ
たかひ首級を均え次も又飛
をかりゆら松平因防守を勇を称
をばと元次が帯もる雨の刃を
助成たり今元勝こそを所持を
天正三年長篠合戦のとき織田
信長と

大権現と相議し武田信玄が軍乃

うし海をかこむじしなまふに
とひく酒井大崎門耐本多を後守
松平固防守等信長の兵士と木
なぐくは名をうあふりり鴫乃
巢の城小を色むき朝小をのびて
狼煙をあふりと幼未し諸將も
りら鴫巢乃城をせむ枝城之奥山
そまかあせきたるかふ元次奥山を
討城をさおもも諸將もりら勝頼

かうし海をまきしん本を要し元次
をして煙を河あさしむこりり
とひく長篠合戦河り勝頼敗を
諸將こまを追討元次色首二級を
とふときり元次が妹婿仲根新助
はしめく戦場しおもむき元次
敵をうらてそ首を仲根小さげく
と云く元次がは日乃戦功
大権現くまを妹英しなまふ

大権現兵をよしくめく朝比奈海前守が
まゝなる乃懸川の城をせえ給ふ少き
元次敵と強をとりて

大権現牧野原より兵をよしくめく小山を
せめたまふとき元次力我敵より飛着
かゝる志かりとて色首級を均分
退陣のとき又我功あり

大権現執訪乃原より木けし海にて松
平固防守牧野右馬乞をて茶

陰より田中藪田を木うけしめたまふ
敵こそをあふしてうか人成海より

この由より固防守右馬乞兵を引て
歸りし系坂より到り小敵こそを
追元次殿志くゆきすか合戦を
右馬乞が家人山本萬五郎少中

この元次よりかりて殿せんそのぞ
矢もよ元次是をゆりさす元次いさ
ひるふ乃是將も又軍功ありこゝに

とひく敵志をさすまね

大権現後列りりり河内田中八幡山
河陣を先陣よとき元次先陣の
中より河内安倍川よりとみて敵と
あひたくりいこまを遣ときり
眼迷小十郎川下りり河内元次
小十郎をて敵の首をきりり
先をかりらあひともり八幡山
いさり

大権現り禰湯を

大権現田中の城をせ先たまり少
とかり元次をり八幡山小と
て乃たまり我きり田中の
城を屠と兵士等の控もの
志先志く敵乃と先りあか
事なれとなり元次上意を取
たくり我の討死せし
思期り及て元次城下小とみ

いふ敵鉄炮をもちから元次が腰小
あしりもふりら堀中ふおらして
り死せんとせりあつた家小家人秋浦仁太
湾取りて元次をたまげおし
きりぐきさ敵急り追て矢を
ちる秋浦をわら平岩源た馬
思田たた馬馳き取りてこまを
くよ元次終り命せ命まる事と均り
大権現こまをきこりめりんハ外科圓山

てこまをくまきり絶たまひ
まかりら飛愈たり志かまをさうれ
鉄炮乃玉を身小こまを肩と腰
とりあつ
大権現冬河を江乃田史を牧野
あはめく後河乃田をかき絶た
ま小国防守先陣り取りてこまがそ
なりとなり一日元次八幡山り
大権現り告をくくしりて

田をかりぬる川をこえたまひ
御陣を必崎より引退るるを
大堰川を一木をへて雨畑の
水
まきまきりるる武田耳りておそ
りしとまきりるるまきりるる

大権現こまをうけこびにけり
まかり川をこへたまふ元次り
こまをうけこびにけり
まかり川をこへたまふ元次り
こまをうけこびにけり
まかり川をこへたまふ元次り

天正八年勝頼が武將三浦兵部
別持舟の城をまもる

大権現こまをせぬたまふまき元次
兵部をうけこびにけり
時一木乘御勅氣をかき
固防守がりとにけりこまを
首をまきりるるまきりるる
まきりるる

大権現乃るまきりるる竹右衛門が三浦を

うの事な一はいさしり一ふがまはと
こ海一河もとてふふりら織
威の御體乃行袖と元次小なふ
いまふ元勝こ道を不持ま

曰十年

大権現小條氏と甲別新府
とひく對陣乃と元越山の兵士
ととくきたりて浪津をせむ
元次与力九十騎をひつくと日本

少時ぎ我山越山の兵敷走もこの
と元次と服部と菟日を一とと
丹田乃有行とたんと功も門と
木

曰十二年

大権現と長秀吉尾列長久と
とひく對陣乃と元次該列浪
津の城一河りまかると

大権現の起和成少とひたて海川

らむためり首途一小牧山の陣
一いたる

大権現乃の海く海をめぐり
と木崎一めき海乃変り
きたまよりまきやふ小倉分
乃のり敵陣の人数をよび我
軍兵の多さを見知りらふべ
一とたり元次別阿部
右諸門西尾藤兵衛と村か

志く矢倉一ののり敵陣をう
かひひ見るふ一の兵十万と
一り志かまき御前一たり敵
兵五万七八子と候あるそまある
大権現我兵をめぐり
阿部一と元次こつたてま
今度の合戦のり敵敗る
と云ふも

大権現をゆへに少したまふ元次

うなむしりりて冬列、春列、甲列
乃兵を法、一人をりてと方
の三人、あつ、かまを諸國
乃候、者なり、御方を諸代忠忍
勇士なり、その掃、とら、る、ひなり
少、こ、く、ま、は、ら、る、ま、り

大権現こまを稱、英、一、な、ま、り、り
て、う、の、も、と、れ、ど、り、御、陣、の
ま、き、え、次、之、他、の、ほ、り、り、ま、り、孫

喝みつを

大権現馬と、り、木、り、御、て、ま、り、り

以、所、相、違、せ、ど、う、の、り、一、先、年

大堰川、の、事、を、木、ほ、り、り、あ、せ

ら、驚、と、て、こ、ま、を、感、一、た、ま、り

曰、十、八、色、小、田、原、陣、乃、と、記、え、次

派、津、を、か、み、み、て、韭、山、の、城、を

せ、心、城、主、小、條、義、濃、守、こ、ま、を

あ、せ、諸、將、兵、を、引、て、り、る、こ、ま

長濃守に道を延元次少腹^{ふら}で^と就^つ

と河ひともふ十八町^{じゅうはち}より^{より}さひく合

我^{われ}一^{ひと}首^{くび}十八級^{じゅうはち}を^を均^なす^り

文祿元年^{ぶんろく}朝鮮陣^{しん}のとき元次

も又^{また}去^さる^るが^がひ^ひく^くそ^そま^まは^はり^り肥^ひ前^{まへ}の

名^な議^ぎ屋^やより^{より}い^いき^きる

慶長五年^{けいぢょう}石田三成^{いしだ}滅^{めつ}亡^{ぼう}して

乃^のら

大^{おほ}権^{けん}現^{げん}祐^{ゆう}垣^{げん}平^{へい}右^{みぎ}藩^{はん}門^{もん}大^{おほ}須^す賀^が五^ご郎^{らう}兵^{へい}未^み

な^なび^び小^こ元^{げん}次^じ一^{ひと}伏^ふ見^みの^の城^{しろ}の^の守^{まも}り

師^し法^{ぽう}け^けら^らる^るべき^の名^な米^{まい}津^つ清^{せい}大^{おほ}門^{もん}が^が敵^{てき}

長^{なが}尾^お武^ぶこ^こを^を法^{ぽう}ぐ^ぐ祐^{ゆう}垣^{げん}大^{おほ}須^す賀^がを^を

命^{いのち}一^{ひと}應^{おう}も^もとい^いて^て元^{げん}次^じひ^ひせ^せり

辞^{ことば}一^{ひと}を^をい^いく^く我^{われ}を^を陪^{はい}官^{くわん}なり^{なり}今^{いま}

め^めされ^れて^て世^よ系^{けい}の^の長^{なが}と^となり

教^{おし}令^{めい}乃^のか^かる^る一^{ひと}若^{わか}者^{もの}を^を謝^{しゃ}せ^せん

と^とも^もさ^さら^らぬ^ぬ用^{もち}防^{ぼう}守^{しゅ}い^いと^とけ^ける^るさ^さら^られ

一^{ひと}恩^{おん}遇^ぐの^の厚^{あつ}を^を門^{かど}下^{した}り^りて^て小^こ細^こなり

と祿のくろし御あはせしをいれ
たまへし言ともくまをいひて
大権現元次前（まのちり）まごひせし御りしうのら越（まら）
前中納言秀康郷山本市左清門
言須半一をいひて元次しり
まふしをいひて越前小島（こじま）に
領地方るをいひてしりしりしり
元次あひしりしりしりしりしり
宣（のたま）ふしりしりしりしりしりしり

七百石を平岩次郎右馬（ひらいそ）しりしりしりしりしり
五百石を依塚七左衛門貫名市兵衛小
與（あま）屋しりしりしりしりしりしりしり
少（すく）之しりしりしりしりしりしりしり
ひりしりしりしりしりしりしりしりしり
元和元年十二月廿六日七十七歳小
しりしりしりしりしりしりしりしりしり

元保

且味右清門尉

孝

元禄三年を別三宮原一とて
我死本を元次が系譜のうらり
はまひつりなり

中根新八郎が妻

忠直

土屋民部少輔

法名淨因

元勝が異父の兄なり

元勝

赤尾内記

生後河

大権現乃侍女阿茶局

元勝を産

なひく子と赤尾刑部少輔と兄

赤と赤を刑部少輔ハ阿茶局乃実子

慶長十一年

白徳院殿一謂一たぐも門下は

ちり赤尾をいれて赤尾と

元和元年大坂陣乃少き松平

同年十月晦日従五位下しんごういげに叙し
備前守びぜんのかみに任じ

まことに家地いけぢをくくると人たまりり千八
百石を領せ

元直もとただ

畠田竹右衛門はたけたけ

孝

執事しやくじの妻めかけ

土屋氏つちやより捕とらて同父どうふなり

孝

相馬大膳亮さうまのたのらうの妻めかけ

元真もとまこと

内通うちとほ 後之水のちのみづと号す

寛永九年八月元真九歳の

とき

將軍家しやうぐんより賜たまはる

同九年四月所小姓組こせがみぐみに入て

番を法とむ

同年六月沖小姓となり沖水番を

法とむ

同十五年十二月と總乃國のころ

一とひく宗地ふるをたよふ

元歳

内膳

寛永十三乙酉八月元歳十歳

一丁

孝

將軍家一湯一たぐま

孝

小堀九郎兵衛が妻

孝

柴田三左衛門が妻

孝

大恩兵衛が妻

能保新十郎が妻

女子

相馬大膳亮まげのりょうやなひく女むすめ

家紋

葛澤くさくさ深ふか

木き札さ

● 来

休尾

長四郎

生息冬河

廣忠卿

一 氏子

利勝

長四郎

生息冬河

東照大権現了了法久たぐま法歌

長定 ちやうてい

助六郎 すけむすし

生息同前

大権現

白徳院殿了了法久たぐま法歌

右勝 みぎかつ

助右清圓尉

生息孝仁

白徳院殿

將軍家了了法久たぐま法歌

長勝 ちやうかつ

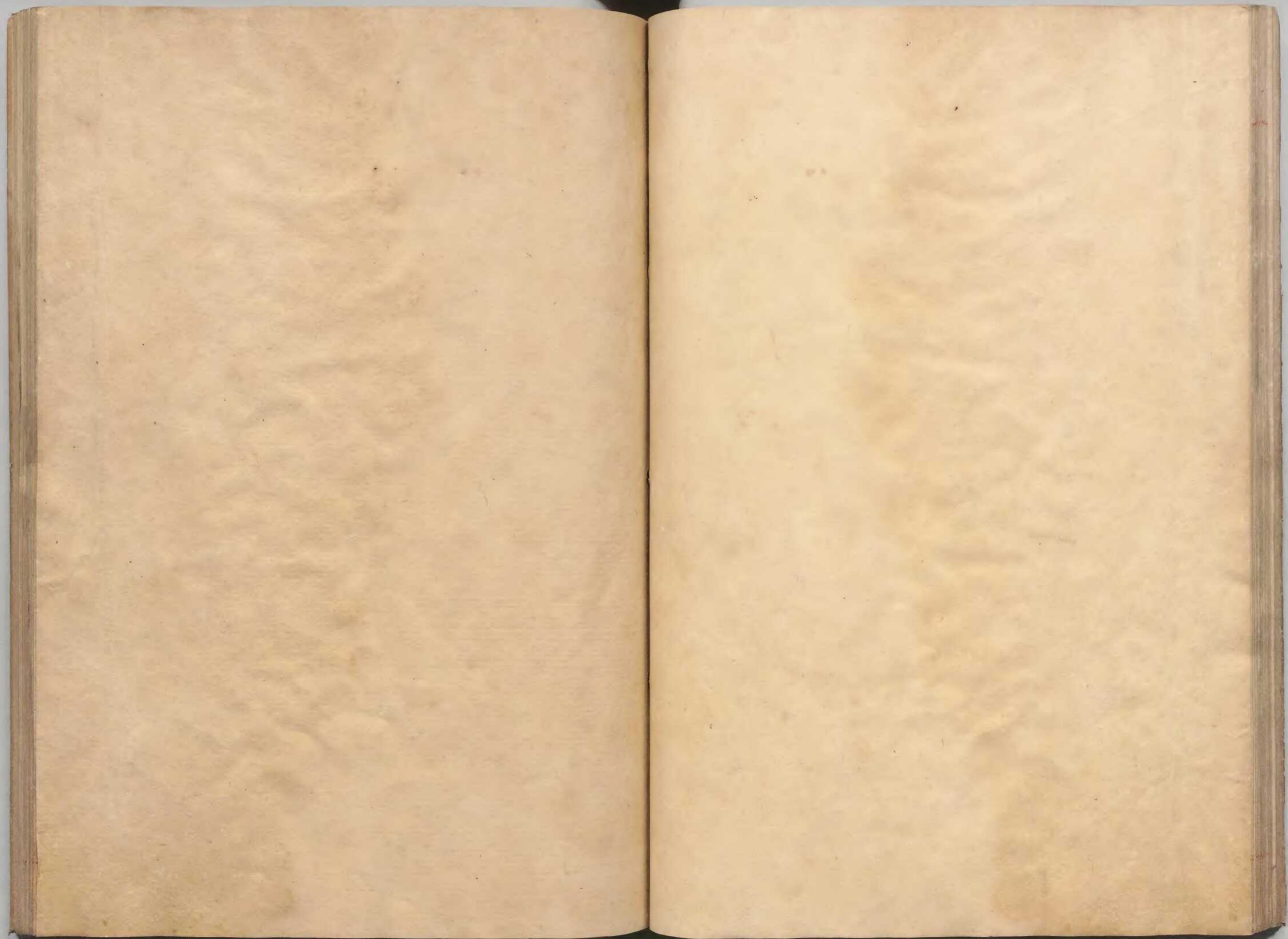
権十郎

生息武統

白徳院殿

將軍家了了法久たぐま法歌

家紋木札 あざのきざし



赤尾 あかお

● 信房 のぶむら

若次郎 わかしら

生後河 なごが

法石道鎮 ほしちみち

房成 むねなり

勝次清洲尉 生後河前

とどめは今川義元同長真小房

そのら武田信玄たけだのぶげん同務頼たから一決いっけつふ
乃ら幸列ゆきりつ淡松たんしょう一いっとひく

東照大権現

白徳院殿しろとくゐん一いっ禰ね謁ごう一いったそま決いっけつ歎

慶長十二年十二月廿九日七十六歳

ゆ一いって死しゆ 法名ほふな道みち念ねん

保重たもぢか

勝次清四尉かつしよしよ

生息なま武ぶ菟う

慶長十四年

白徳院殿しろとくゐん一いっ謁ごう一いっとそま

文和四年ぶんわしよ一いっと

將軍家しやうぐん一いっ決いっけつ一いっとそま

保次たもぢか

小次清門尉おしよしよ 生息なま同どう前まへ

寛永十二年十二月十日

將軍家しやうぐん一いっ禰ね謁ごう一いっ決いっけつ一いっとそま

家紋
木風

● 東

藤九郎

生尾張

法名道忠

長考者一法名

祢尾

本名堀田と称し幸忠下りて

祢尾と阿る心

某

庄九郎

生息同前

秀吉より流し朝鮮陣より

討死

某

立菴

生息同前

白徳院殿より流しそまつる

慶長十六年死す

幸忠

猪兵衛尉

生息同前

幸忠補尾形部少輔が姪たりたり

堀田を河をぬれ補尾と称す

慶長十五年より

白徳院殿

將軍家より流しそまつる

寛永十二年丁卯四月十八日

幸勝ゆきかつ

猪久瑞門尉

元和九年丁卯

將軍家一子

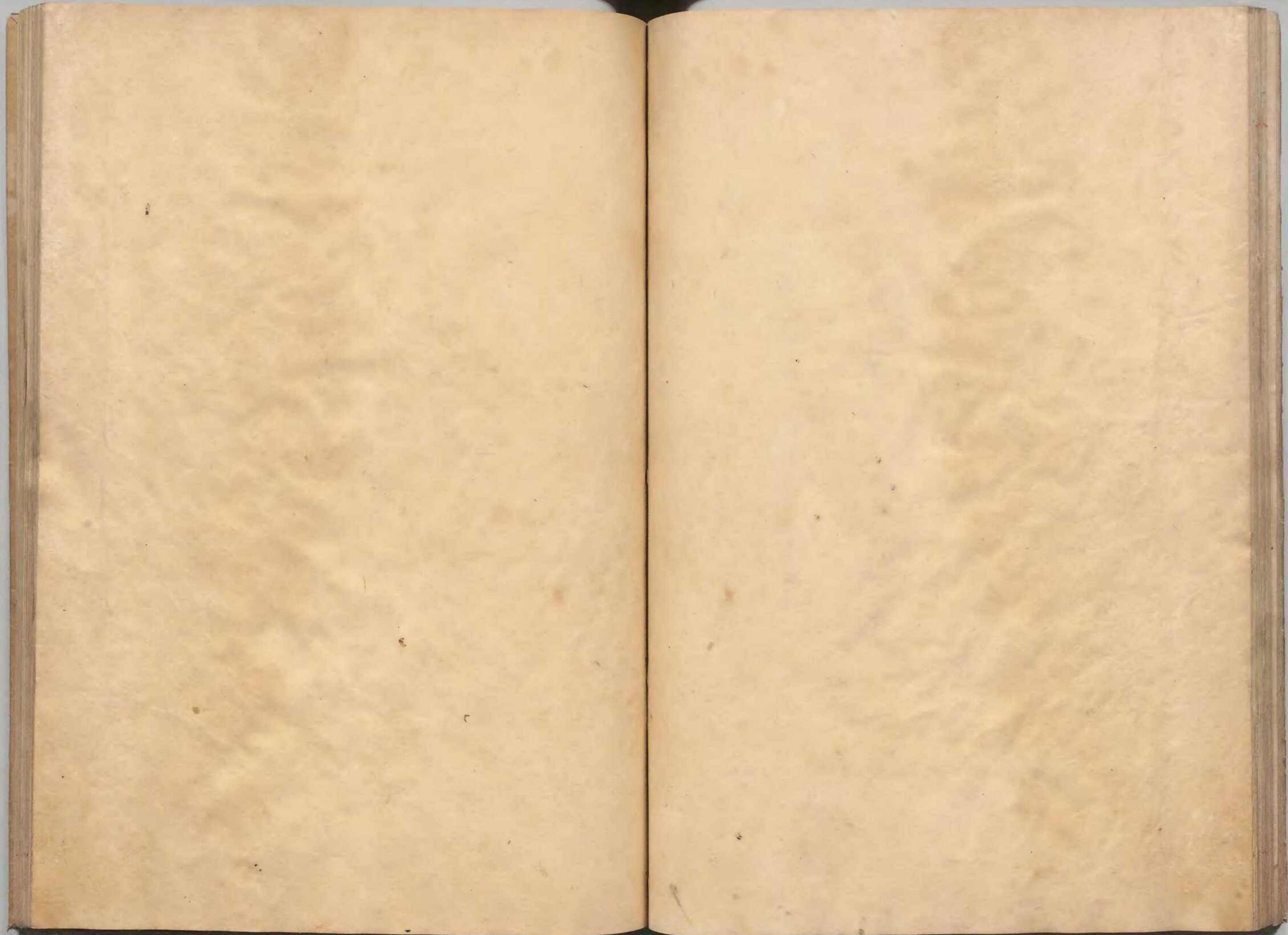
光忠みつただ

勅兵衛尉

生武苑なむきえん

將軍家一子

家紋立木たてき 弘ひろ 綏すい 復ふく



● 某

六郎兵衛尉

补后ミヤ

清次きよしげ

与次右卫尉よし

生息冬河み

清次二宗しげ

丁

父を喪むす

て

补后

六郎兵衛養育して子とせばゆり
先祖のこゝろをたゞも六郎兵衛を植村
庄右衛門が姉むこなりこ乃こき六郎
兵衛より一男して敵讎有り清次十
六歳のときこを討

東照大権現このとを園石とよむれ
ゆく感とたまふ
元龜三年十二月を列三方原合戦
の少とき植村が佃一属とて進

とてい首級を均有り

大権現こをを称英一たまひ五十貫
文の地をたまはる

天正三年正月冬列長篠合戦の
と記す又植村が佃一属して首
級を得有りこ乃とき沙威を

ありて又五十貫文の地をたまふ
大権現を別漢みりしひく不願ち
門徒を禁制し給ふとき大権現禁

かの内流をり

大権現植村より命じてこま成らる

めたまふ清次植村より代て大野を

らりより首を提漢松小いそり

高談より仰ふ

大権現もかきよ清次が勇敵を感

たまふ

曰九年言天神より供奉を

曰十年甲別陣より供奉を

曰十二年尾別長久年合戦のとき

植村が組より属してしきみそを

首級を得たり

大権現神威の餘り又二十貫文の地を

くまふたまふ

曰十八年小田原陣のときを

植村より属志く足柄乃城番をつ

とむ

曰十九年奥別陣乃ときを

上野正純のまこと小属のこぞして皮地あし小おそ

4

慶長五年石田治部いしだのちぶ少輔すけ之派のしや謀叛

乃少のすくき又本多正純ほんたのまこと一属ひとぞして

濃列のうりつ因原いんげん一ひとたる

元和元年

台徳院殿たいとくゐん食邑しょくえきをたす

大坂陣おさかじん乃のとさと酒井さか備後守びごのりが

組ぐみとなりて江戸えど川城かわじ乃の番ばんとす

八十五歳はちじゅうごさいして死しす 法名ほふな淨じやう念ねん

清正

与七郎 生誕なまうまれ同前

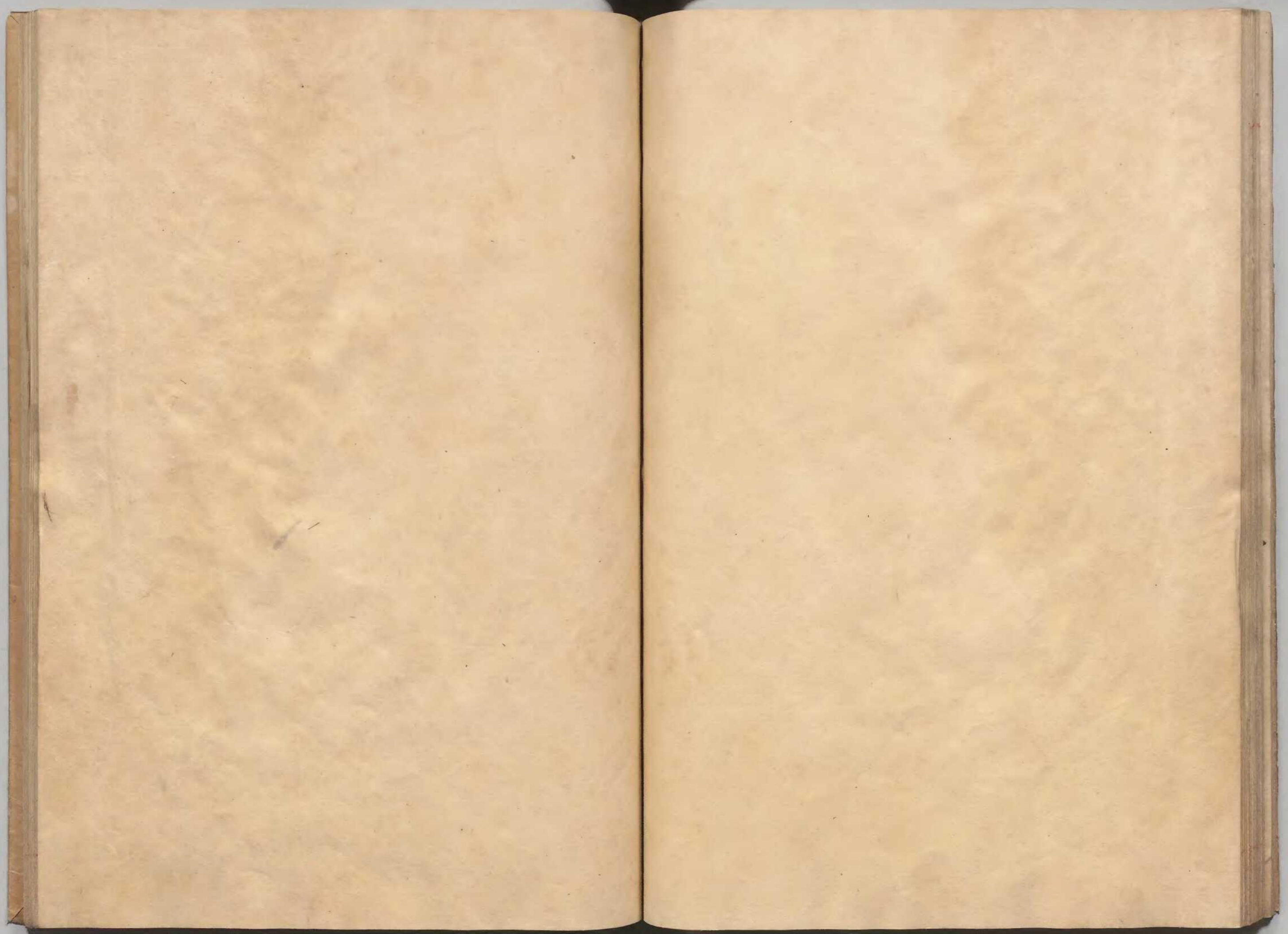
天正十三年尾列おしり紫源寺むらさきげんじ赤目あかめ小

御ごよりて乃のときときなり

大指おほさし現げん一ひと禰に謁えつ一ひとたてまはさる

曰十八年小田原陣おだわらじん一ひと供奉くわんぷなり

曰十九年奥列陣おくりつじん小供奉こくわんぷなり



● 和久

休若

助兵衛尉

生息冬河

水野下野守が家老なり

天正十二年六月二十七日冬列薨

り七十七歳

法名全忠

長直

合七郎 生國曰前

水野和泉守が家老なり

天正十二年

東照大権現豊長秀吉と尾羽長久平

小とひくまそ小呂陣小をよりの

せーとき秀吉が和泉守に

げていよく若秀吉に附屬せしむ

とひくまそ河をにぬ國をりり

わふふ屋とたりはと和泉守家

人をあゆめくこ道を合議も長直が

いよくひと

大権現に属せしる屋と

和泉守長直が誅言に

てもかりら長直を演説に

りむ長直 柳前

してはまのふ本の子細

その庵をそまはつて
大権現所傾慌阿りて別里小鶴乃
駿馬をたまひつらばと此所小鶴
秀吉也合戦一をうぶ少きこ
乃馬一のりてかろしと率
を進退と一也なりと是も小
合戦の時秀吉乃軍將秀次并
小本下助在秀尉と相戦大小是と敗こ
あまをひく水指海後守本下とらる

文祿二年三月八日五十八歳ありて
死す 法名桃林 常見

三正

次馬助 冬別前屋小うま
水野和泉守了法
天正十二年長久也乃戦場
をひく銀甲を着る武者を討
と為陣陣乃ら小牧一とひく

大権現おおくま久保くぼ与よ一いつ部ぶ小命このみことトとて和泉守いづみのもり
が戦功いくさのいさをしを决断けつだんし給ふこのと現ま三さん正せいが
均ひとるらとら海うみの首級くびきニにこまを頭かぶさふ

慶長十四年正月廿七日

白徳院殿しろとくゐんよりめしつゞされ法はふのの人ひとをそ

史し法はふ名な

元和九年四月二十八日より

將軍家しやうぐんより法はふのの人ひとをそ

之盛のみさき

小次清門尉こしやうもんゐり 生息せいそく武苑ぶゐん

寛永十六年七月廿二日

將軍家しやうぐんより洋やう謁てつを

正次せいじ

左大將さだまさ 生國せいこく同前どうぜん

寛永八年六月廿六日

將軍家しやうぐんより謁てつを

家紋
象甲きりの内ふと羽しらの蝶かへ

目次

助兵衛尉

武列

慶長十五年十一月三日

大指現

白徳院殿

將軍家

家紋 上羽蝶

● 正利

休養

長次瀧門尉

生國冬河

廣忠卿のり一ま法のり其のり乃のり

東照大権現のり一ま法のり其のり乃のり

永祿四年のり七十五ま歳のり山のり一ま法のり其のり乃のり

法名休心

正昌 まさあき

千五郎

生息回春

大権現だいけんげん一い法はふ之の一いそそままうう

天正七年てんしやうしちしやう四十二しじふに歳さい中ちゆう一いてて死しす

法名はふな月秋げつしゆう

正源 まさげん

継房助 ついでふさすけ

大権現 だいけんげん

白徳院殿はくとくゐん一い法はふ之の一いそそままうう

寛永六年かんゑい六十二ろくにじふに歳さい中ちゆう一いてて死しす

法名はふな淨龍じやうりゆう

次重 ついでしげ

穴清門尉 あなしみんじゆう

生息なま武藏むさし

文和七年ぶんわしちしやう

白徳院殿はくとくゐん一い禰ね湯ゆ也や

寛永九年

將軍家しんぐんけより決きんりてそのまゝ御所ごしょへ

廻めぐり別わかりし御所ごしょへ

同十年どうじゅうねん御所ごしょへ御所ごしょへ

家紋けもん取とり凡おほの心こころ上かみ羽はねの蝶ちょう

神宗 しんしゅう

● 政利 せいり

九郎次清門尉

生息 なま 冬河 ふゆがわ

東照大権現 とうしょうだいこんげん 一 いち 法 はふ 如 にょ 一 いち 寺 てら 門 かど 尉 ゑ

政直 せいぢく

傳十郎 でんじゅうらう 生息 なま 同前

大権現一一法二一三そま四つ五

慶長六年二月二十九日二十九日

あ〜〜花一

改次（しんじ）

八郎大浦門尉 生息武藏（しんじ）

慶長十八年より

大権現一一法二一三そま四つ五

元和二年より

白徳院殿一一法二一三そま四つ五

寛永元年より

將軍家一一法二一三そま四つ五

曰二年、沙切米をた（ま）

曰十年、領地をく（ま）つ（ま）

部（ま）て五百二十（ま）部石を領（ま）

改次（しんじ）

傳十郎

生息同前

寛永十二年

將軍家より孫^{くわい}謁^{きり}を

同十八年五月より大御番^{おほごばん}を法^{はふ}と

家紋 悉^{まこと}甲^か乃^の内^{うち}小^こ上^{かみ}羽^は蝶^{てつ}二

● 重次

松木

本名野田と称む重次小い有りて
松木と河〜心

野田与次漸門

生玉伴録

法名淨雲

多氣小島杖親

ち〜び〜

晴具

氏名

親派

野田兵清 生息同前 法名道意
多氣小島晴 具名いさ比ひ一いち具教小
法しののよ

派次

松木七次清門 生息同前 法名しん了りやう松
ここづづめめ奥教小 法しののよよののらら浪人なみのりと

かりて甲列こう一いちいいなり野田を阿あ〜
めめ〜松木と号ごう也

忠成

七郎兵清 甲列こう一いち生せいる 法名銀哲ぎんてつ
天正十年
東照大権現甲列こう沖入國おきりくにののとといいわわれれて
法しののよよ〜

義成

七左衛門 生息曰前

法名曰忍

淨成

市左衛門 生息曰前

白蓮院殿

將軍家一法也より受くふといて

御代官を法とす

寛永十八年六月二十一日一紙也

法名曰庭

勝成

市左衛門 生息曰前

將軍家一法也より淨成が是跡を

たまりりて御代官を法とす

申成

七左衛門 生息曰前

伯父義成や一なりく子とす

房成

二九部

生息上り

貞成

六之助

生息同前

安成

七郎兵衛

生息甲斐

大権現

白徳院殿

將軍家

忠継

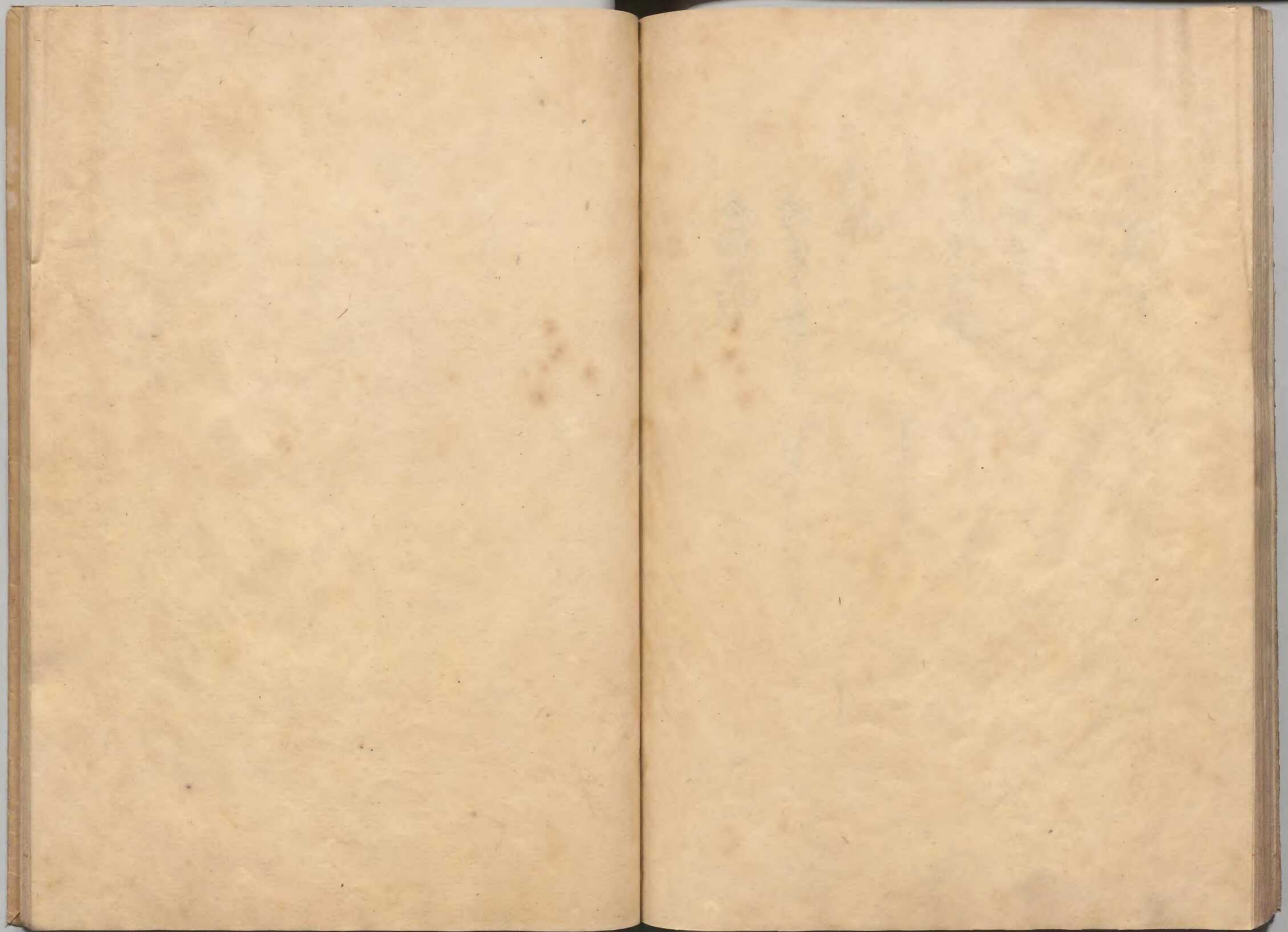
三大史

生息同前

白徳院殿

將軍家

家紋行成



忠家 ちか

五兵衛尉

生息 後河 法名 休也 きよ

實冬 跡尾 長五郎 か子なり

某 なにか

五郎 太清門

生息 申發 のい

松木 まつき

五郎右衛門が督とありて家督をつぐ

忠源

五郎兵衛尉 甘五甲斐

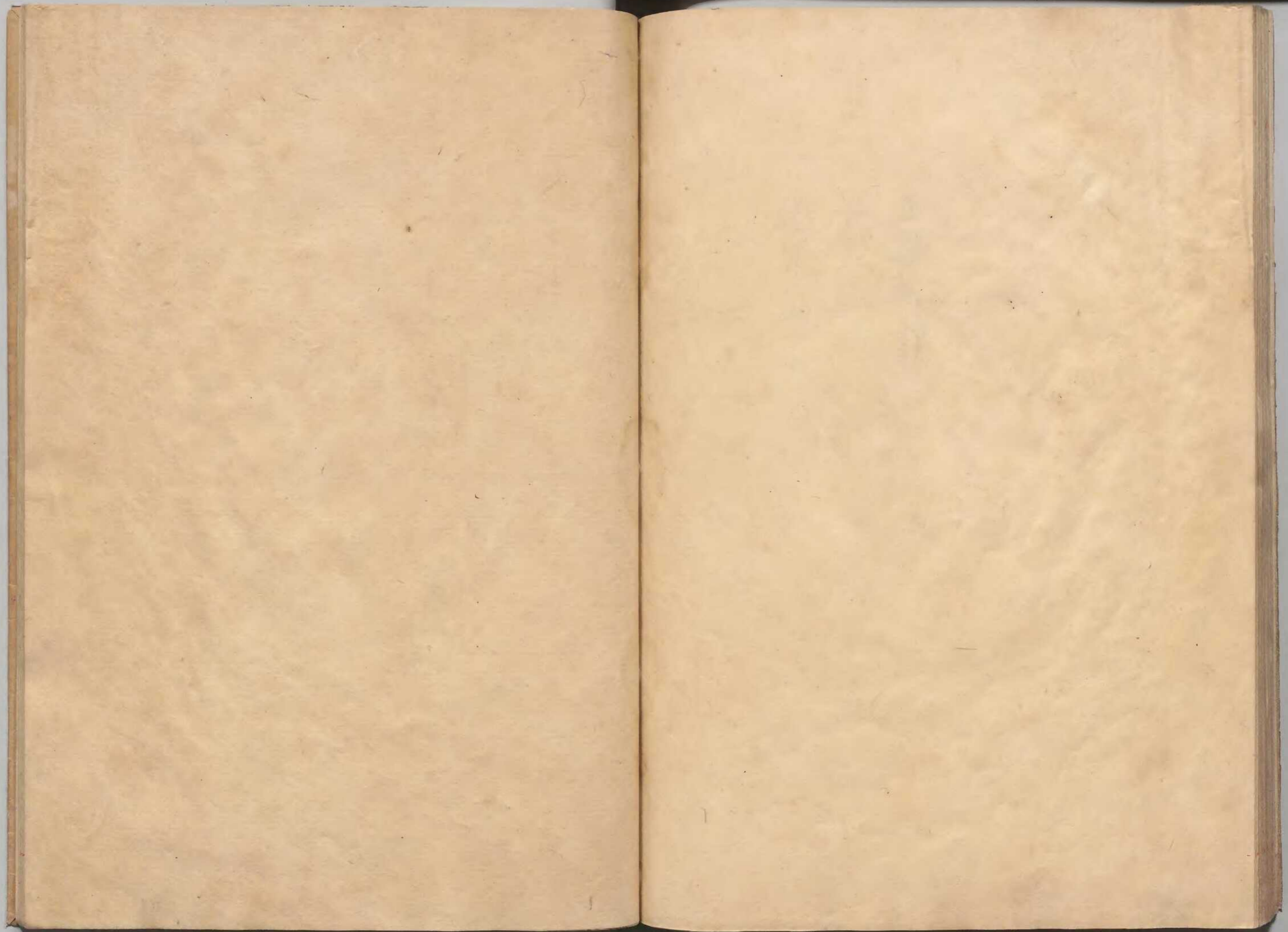
めまれて

東照大権現

白徳院殿

將軍家より此のくそまら

家紋 緩管 木札



葛木

本を細見寺と号す蓋次小いそりて
葛木と阿〜む

蓋正

細見寺りけんじや 彌陀門 生息信濃しよくしの
武田信玄たけだのぶのぶ 一法いつぽう 信別しんべつ 上田原合戦かみのうらなごうせん のとき 信玄しんげん の

馬前うまのまへ一ひとひくはと先まへをくみて
討死うちしもこそ一ひとよりて信玄しんげん感書かんしょと
盛次もりつぐ一ひとさはく

盛次もりつぐ

越前えちぜん 生國なまくに回まわ花はな

ふとめを知見ちけん寺てらと祿ろくものら
めく葛木くずきと号ななも
父盛正ちちもりまさ戦死いくしののら遺跡いせき成法じやうぽうき

信玄しんげんなび小勝頼こかつらう一ひと法はう也なり

天正十年てんしゅうじゅうねん勝頼かつらう没落ぼつらくののち後のち甲斐かい信濃しんのう
の境さかい葛木くずきの小屋こや一ひと屏后へいきよと
曰年いひねん小條こじょう氏直うぢのちか甲列かへつ小出陣こいでちんと

東照大権現とうしやうだいこんげんをもつ御進みしん教しやく河かりことを

河かりことを

大権現だいこんげん乃なり先鋒せんぽうをで一ひと甲列かへつ一ひと入いり

とき盛次もりつぐ山やま高宮たかみや内うち少すくなくりことを

河かりこと武川ぶせんの士し少すくなく河かりことを

信列既訪の内小浪小庵を少々
大権現新府より若冲の少浪盛次
旗下より渭一をり志らく忠告
をぬえんばこそよりりて諏訪の内
小浪今橋をたまりは是盛次が本領
をよりりよりりてなりそのら盛次親
族をして事急よりはりり敵の謀者
をうちりりりてこそを新府小献
どのら数度軍忠をさげしめし

よりて若木村をくはへたまふ
日十二年尾列小牧對陣のとき
信をかりて信列真田をささ
へんがた次小務馬のよりりて小在番
をそのら又 信をうあたまよりりて
尾列小浪より牧野中島が下系
をささひて一妻の番をたせむ

日十三年九月

大権現兵を信列小浪よりりり

盛次妻子を人質として後列り
献し大久保七郎右衛門が佃小属志
かの地より教向し忠節を修く事
よりてかこいもあきき

大権現より御書を武川の上り
盛次もうけりてうかり

同十八年小田原陣の上見供奉を
法と心

同年国东所入五の上見武列陣

形をひて宗地をたまらるる
しけきも常番をゆりさせたまひ
この地より居

同十九年奥列陣のときも
有り宗も沢りい

文禄元年朝鮮陣の上見き

ゆをうけたまはりて伊豆の山小

御船板の板木をいづも山本常

刀このときも所あり

慶長五年 以

白徳院殿

信列真田

同八年

増之武川津令乃士十騎甲列小

い

同十二年甲府乃城

尾張義直卿乃傳

移

作

少

同十九年大坂陣

守

一

乃士

大権現

元和元年大坂陣

同膳守 釣命

上云

甲府よりいづる盛次等こもふかきり
て上宗一ニ条の河城小とひて深
礼をこの少殿 休をこりて
知見寺を河〜〜〜〜〜
知見寺を寺の名より河ぎらふより
てかり

曰二年

大権現堂造乃とき
白徳院殿を深礼也

曰年後河忠長卿甲列を領せし
るよりりて盛次等 休をかり
卿り忠長卿より一属也
寛永九年二月古より死に案八
法名曰久

盛次

孫右衛門 生息武苑
大坂あ度乃御陣小父盛次と書

トくと京一太坂一をひく

大権現を禰礼とこの堂に祀り

けりき糶米を洋米と

元和六年忠長卿一謂一太

を法とむ

寛永九年盛次が是疎を法とむ

曰十年忠長卿豊玄乃のらり

けりき

將軍家より糶米を二海り

曰十九年十二月古一り

これ甲列牧原三次村小とて

をたまふ

家紋



